

# チート薬学

CHEAT YAKUGAKU DE NARIAGARI!

hakushaku ke kara houchiku saretu kedo  
yasashii shishakuke no youshi ni narimashita!

## 成り上がり!

伯爵家から  
放逐されたけど  
✧ 優しい ✧  
子爵家の養子に  
なりました!

4

著 めこ

illust. 汐張神奈

MAIN CHARACTER

## 主な登場人物

### ◆◆ マンテ爺 ◆◆

可愛い強いアレクの相棒。でも本当の姿は巨大なマンティコア。よく寝る。

### ◆◆ アレクのパーティ ◆◆



オレール



パスク



ナックス

### ◆◆ アレク ◆◆

女神からスキル(全知全能薬学)を授かり異世界に転生させられた本作の主人公。その力を使って、異世界で成り上がりを目指す。

### ◆◆ ラヴァーナ ◆◆

魔ノ国を統べる現魔王。人族に戦争を仕掛けたいが……。

### ◆◆ ヴェルトロ家の人々 ◆◆



カリーネ



ヨゼフ



セバン



ナダリー

### ◆◆ アレクのクラスメイト ◆◆



フレデリカ



レオナード



セト

### ◆◆ デュアル ◆◆

魔ノ国の初代魔王。変わり者と評判で、なぜかアレクと気が合う。

## 第一章 伯爵はくしやくになったアレク

ヴェルトロ子爵家（現・伯爵家）に養子として迎えられたアレクは、当主ヨゼフとその妻カリーネだけでなく、執事のセバン、メイドのナタリーといった優しい人々に愛され、幸せな毎日を送っていた。

そして通っている学園では友達との交流を楽しみ、学園祭に参加するなど、大いに学園生活を謳おほ歌かしていた。

しかし、アレクの平和な日常を脅かす存在が現れる。  
奴隷どがいとなった、かつてアレクをいじめていた兄、ヨウスである。

裏社会で暗躍する謎の存在、ゼロ率いる組織の仲間となった彼が、再びアレクの前に立ちふさがったのだ。

アレク、ヨウス、二人の争いにゼロの仲間も参戦して、戦いは激化していく。

激闘の果てに、ついにヨウス達を制圧したアレク達。

こうして彼らは再び穏やかな日常を取り戻すのだった。



王都、そして各領地は甚大な被害を出した。

再建が行われる前にまずは死者の弔いが行われ、王都には死者の名前が刻まれた石碑が建てられた。

これは、弔いとともにこの悲惨な出来事が未来永劫忘れ去られないようにするためだ。

そして、多くの人が石碑の前に集まり花を供える姿や、この戦いで被害者家族のすすり泣く姿がしばらく見られた。

それから復興が始まり、冒険者、騎士団、街のあらゆる住人も手伝い、再建が着実に進められていった。

この戦いで唯一よかったことは、一致団結して、ともに手を取り合おうという人々の優しさや強さが、こうして見られたことだ。

ちなみに、アレクは陛下から依頼を受けて、ポーションの製造を任されていた。

各地で怪我人があつとを絶たず、ポーションが不足してしまい、仕方なく依頼を受けているの

だった。

そんなわけで、アレクが執務室でポーションを作る仕事をしていると、ドアの外からノックする音が聞こえた。

「は〜い！ どちら様ですか？」

「ファビロです」

「どうぞ、入ってください」

オールバックの、まだ二十代半ばの、ファビロと名乗った男が入ってくる。

「アレク伯爵様宛に手紙が届いております」

「ファビロ、伯爵はやめてよ。そんな器じゃないし、まだ叙任式すらやってないんだからさ」

アレクは椅子に腰掛けながら、ファビロに恥ずかしそうに言う。

「何をおっしゃいますか！ アレク様は王国を救った英雄の一人ですよ。それから、正式に陛下から書状が届いているではありませんか」

今回の功績を称えて、伯爵の地位と王都に屋敷をもらった。

ちなみに、ファビロは陛下が用意してくれた、この屋敷の執事だ。

「はいはい。わかったよ。それで、手紙には何が書かれていたの？」

「王印が捺<sup>おさ</sup>されておりましたので、確認はしております。こちらになります」  
アレクは手紙を受け取り、中身を確認する。

そして、面倒くさそうな顔をする。

「もうファビロが、あんなこと言うから叙任式と晩<sup>ばんざん</sup>餐会の案内状だったじゃないか！ はあく面倒くさいな」

「やっと、この日が来たのですね。このファビロ、一生アレク様にお仕えいたします」

ファビロは、将来が確約されているアレクに、執事として仕えることができ感動していた。

「はいはい！ ファビロよろしくね。それより、ポーシヨンの件はどうなってるの？ 正直もう作るの疲れたんだけど」

アレクはわざと肩を揉むような仕草をし、疲れたアピールをする。

「あ！ そうでした。その件につきましては依頼完了とのことです。あとは各地のポーシヨン職人達が備蓄分を作り始めているとのことです」

「そっか、やっと解放されるんだね。疲れたああああ。そろそろストレンの街に帰りたいんだけど問題ないよね？」

無限ポーシヨン製造機と化していたアレクは、ファビロの声を聞いて、伸びをしながら安堵した。  
「はい！ お帰りになられるなら今しかございません。叙任式が終わり次第、各領地から領主様自

らアレク様を訪ねられると思いますので」

「ああ……確かに……って、俺まだ十三歳だよな？ なんでこんなに忙しいんだろう」

実際に「復興が終わったらアレクに感謝を述べに行く」、という文面の手紙が何通も送られてきていた。それを思い出したアレクはゾツとする。

ちなみに、復興が行われて一年が経ち、アレクは十三歳を迎えていた。

「あ！ ファビロ、叙任式が終わっているいろいろ落ち着いたら、ヘルミーナと正式に結婚するから式の予定とかいろいろお願いできるかな？ ヘルミーナには直接伝えるからさ」

「はい！ かしこまりました。準備を進めさせていただきます」

「あと、領地とかもちょうじになるのかな？ 領地経営とか正直面倒くさすぎて嫌なんだけど」

アレクは、領地を豊かにするとか絶対無理だとか考える。もし領地をもらった場合、心身ともにおかしくなってしまうと思うのだ。

「今のところ法衣貴族扱いになっておりますが、陛下がアレク様を利用しないとは言い難<sup>がた</sup>いです  
すね」

ファビロは、陛下から紹介された人物にもかかわらず、陛下から利用されないかと助言めいたことを言う。ちなみに、法衣貴族とは領地を持たない貴族のことだ。

「はああ……だよな。ちゃんと依頼料、それもかなりの代金を払ってくれるから、断るに断れない

んだよね。しかも相手は国の最高権力者だし。それに、今回の伯爵の件も断ろうとしたけど、宰相様が直接来て、『この功績で断ろうものなら、この先誰にも爵位を与えられないし、叙爵される側も断るしかなくなってしまう』って泣きつかれたら、断ることなんかできないよね」

「でもその通りなんですから、受け入れてください。それより、泣き言はこれくらいにして、ストレンの街に向かわれてはいかがですか？ あちらで数日過ごせば気も晴れるでしょう。いない間の屋敷の管理は私めにお任せください」

「そうだね。じゃあちょっとストレンの街に行くよ。いない間、屋敷をよろしくね」

そう言って転移をするアレクを、ファビロは笑顔で手を振って見送るのであった。



アレクは転移をして、ストレンの街の、ヴェルトロ伯爵家の屋敷へと帰ってきた。

屋敷の庭に転移したのだが、ちょうど母のカリーネが、幼い双子のノアとカレンと一緒に散歩をしているのを発見した。

「お母さん、ただいま」

アレクの声を聞いたカリーネは、すぐさま振り向く。

「え？ アレクちゃん!? いつ帰ってきたの?」

事件が終結して以来、一年ぶりに帰宅した。そのせいもあって、カリーネはかなり驚いている。

「今さっき転移で王都から帰ってきたところだよ」

そう言うとカリーネは、双子の乗った乳母車を押しながらやってきて、アレクをギュッと抱きしめる。

「アレクちゃん、お帰りなさい。ずっと待っていたのよ」

カリーネは、泣きながらアレクの帰宅を喜ぶ。

「お母さん、遅くなってごめんなさい」

それでもなかなかカリーネは泣きやんでくれず、アレクが背中をポンポンと優しく叩いていると、ヨゼフと、ヴェルトロ家の執事のセバンがやってきた。

「お、アレクもマンテ爺も帰っておったんじゃないな。ん？ 馬車もないがどうやって帰ってきたんじゃない?」

ヨゼフは、アレクが転移を使えることを知らないの、疑問に思う。

「セイランさんという方に転移魔法を学んで、転移で帰ってきたんだよ」

「ヨゼフ、久しぶりじゃな。あとで軍棋をやるぞい」

そこへマンテ爺が、アレクとカリーネの間から顔を出して言った。

「転移じゃと！ またアレクは、すぐくなりよったのう。マンテ爺、ワシを前のワシだと思わんことじゃ。返り討ちにしてやるわい」

「ほお、それは楽しみじゃな。その自信ごと粉砕してくれるわ」

なぜかマンテ爺とヨゼフが火花を散らしている。

アレクは、いつの間に仲よくなったのかと思う。

「お帰りなさいませ。アレク伯爵様！ セバンは、嬉しゅうございます。こんなにご立派になられて」

セバンは、ハンカチを目頭に当てて嬉し涙を拭<sup>ぬぐ</sup>っていた。

「もう、セバンまでく伯爵はやめてよ。なんか恥ずかしいでしょ。それより、そろそろお母さん離してよ。ノアとカレンにただいまの挨拶をしたいんだから」

カリーネは、渋りながらもいやいや離してくれた。

そして、乳母車に乗るノアとカレンの前に行つて屈むアレク。

「ノア、カレン、ただいま。元気にしてた？」

アレクは、二人のほつぺたをツンツンとしながら話しかける。

ノアとカレンはキャハハと笑い、アレクはメロメロになる。

「今日は、泊まつていくんじゃろ？」

「うん。一週間くらいはいる予定だよ。そのあとは叙任式があるから王都に帰るかな。あと大事な話があるから、夜時間を空けてくれないかな？」

アレクはヨゼフにそう伝えた。

ヘルミーナとの結婚を考えていることと、まだ打ち明けていない秘密をみんなに話そうとしているのだ。

「なんじゃ？ ワシだけが聞けばよいのかのう？」

「お父さんとお母さんと、セバンと、師匠と、パスクと、オレールさんと、マンテ爺と、ナタリーには話しておきたいかな」

「うむ。わかつたのじゃ。セバン、ノックスとパスクとオレールとナタリーには、夕食後会議室に集まるように言っておいてくれんか？」

これだけの人に伝えたいということはかなり重要な秘密なのだろう、そう察したヨゼフは、セバンにすぐ手配するよう言った。

「かしこまりました。では私は、お伝えして回りますので、失礼いたします」

セバンは、忍者のようにスツと消えた。

「そうじゃった。ノックスも、パスクも、オレールも、アレクに会えるのを楽しみにしておったぞい」

「俺も楽しみだよ。冒険者として鍛え直すって言うてから一年だもんね」

王国が崩壊する脅威があつてから、いつかルシファーとの戦いがあるとわかつていた三人は、鍛え直しをするために、スベアを連れて各地を回っていた。

そして一年が経ち、冒険者ギルドに届いた叙任式の通知の手紙を受け取った三人は、ちようど戻つてきていた。

「二日前に戻つてきておつたのじゃが、なんでもS級になつたという話じゃ。それより、中に入つてお茶でも飲みながら話さんか？」

ヨゼフは、屋敷の前にもかかわらずつと立ち話をしているのもおかしい話だと感じて、屋敷に入ろうと提案する。

「そうだね。いろいろ話したいこともたくさんあるからね」

「私は、ノアとカレンともう少し散歩をしたら戻るわね」

「わかつたわい。少し肌寒くなつてきよつたから、体を冷やす前に戻るんじゃぞ」

カリーネは「はーい」と元気よく返事をして散歩の続きに戻つた。

アレクは、いまだに仲がいいヨゼフとカリーネを見て、自然と笑みが溢れた。

それから、ヨゼフと屋敷の中に入る。

メイドがアレクの帰宅に驚いていた。セバンの教育のたまもので、すぐに姿勢を正してアレクに頭を下げて挨拶をする。アレクは笑顔で「ただいま」と言つて、ヨゼフの書齋へと向かつた。

書齋に着くと席に座る。すぐにメイドがやつてきて、お茶の用意をしてくれる。

「そうじゃつた！ 家名はどうするんじゃ？」

アレクは伯爵となり、ヴェルト口家からは独立したことになる。そのため、ヨゼフの言うように、新しい家名を付けなければならなかつた。

「夜みんなに話す内容でわかることなんだけど、高橋たかはしつて付けようと思つてるんだ」

「タカハシ？ 珍しい家名じゃのう。じゃが、アレクにとつては意味のある家名なんじゃろう？ 詳しくは夜に聞こうかのう」

高橋とは、アレクの生前の名前だ。もし、家名を付けるなら前からこれだと決めていた。

アレクとヨゼフは、このあと他愛もない話をした。そしてそのあと、マンテ爺とヨゼフの軍棋対決を観戦するのであつた。



アレクが夕食を終えて、お風呂に入ってから会議室に向かっていると、見慣れた人物が歩いてい

るのを発見した。

「アレク様、お久しぶりです。戻られたと聞いて、居ても立ってもいられず、早く来てしまいました」

パスクがそう言って、手を振って駆けてくる。

「元気にしてたみたいでよかったよ。それにしても強くなったね。雰囲気だけでヒシヒシと伝わってくるよ」

アレクは、ノックスやオレルとともに、敵だったナンバーズなどの強者を目の当たりにして、雰囲気だけで強さを測れるようになっていた。

「アレク様に、そう言ってもらえると頑張った甲斐かいがあります。マンテ爺も久しぶりですね。元気にしていましたか？」

「アレクとの模擬戦以外は体を動かす機会がないからのう。軍棋だけがうまくなってしまったわい。あとで一局やらんか？」

マンテ爺もすっかり人の世界に馴染なじんで戦闘以外では穏和な性格になり、軍棋が大好きなだけのマンティコアになっている。

「わかりました。あとで一局やりましょう。マンテ爺がどれほどの打ち手になったのか見極めさせてもらいます。あ！ そうですね。皆様もう集まられておりますので、アレク様を呼びに行こうと

していたのです」

「そうだったんだ。じゃあ会議室に行こう」

パスクだけではなく、アレクに会いたくて、全員が待ちきれなく、予定時間より早く集まっているようだった。

アレクが会議室に着くと、すでに全員が集まって席に座っていた。

「アレク様、お元気そうで何よりです。私も王都に行かれればよかったのですが」

「そのお腹じゃ仕方ないよ。それよりも、大事な時期に呼び出してごめんね。あの時、ナタリーに話したことをみんなに告げようと思ってね。ナタリーには改めて聞いてほしい」

ナタリーはセバンと結婚をして、すぐに妊娠した。お腹も大きくなって、もうすぐしたら生まれようだ。

「大丈夫ですよ。安定期に入って長いですし、階段とかはセバンが抱っこまでしてくれまますから。それと、とうとう話されるのですね。どんな結果になっても、私はずっとアレク様の味方です」

ナタリーとセバンは、かなりお似合いだ。抱っこ発言にはセバンも恥ずかしかったようで、顔を真っ赤にさせた。

「アレクくん、お久しぶりですね。随分大変そうですが、伯爵の仕事には慣れましたか？」  
オレールが一年前と変わらない雰囲気です話してくる。彼は、アレクが伯爵になろうとも変わりになく接してくれる人物の一人だ。

「貴族としての仕事よりも、復興の仕事の方が多くて……正直、これから、陛下からの個人的依頼の仕事と、貴族の仕事両方がのしかかった時に、やっていけるのか心配です。冒険者もしたいのにな」

アレクは、前世の仕事の辛さを思い出し、同じようなことになるのではないかと疲れた表情をする。

「そんなもの断わりやいいんだ。なんでも引き受けるから相手が付け上がる。できないものはできないと断われ！もしグダグダ言ってくるなら、国を出ると強く言ってやればいい」

ノックスが話割って入ってきて、彼らしいことを口にする。

「それができれば苦労しないですよ……」

「アレク坊！数年前を思い出せ。数年前のアレク坊は、自由に生きたいと思っていて、縛られることを嫌って、あと先考えず抵抗していただろ？まだ十三歳だ！いろいろ失敗していいんだ。一度昔を思い出して、自由になることも大事なんじゃないか？もし失敗してすべてを失っても帰る家もあるし、俺達大人が助けてやる。だから本心を隠して苦しむようなことはするな。わかったな？」

アレクは、ノックスの話聞いて自然と涙が溢れていた。

すると、後ろからヨゼフとカーリーネが抱きしめる。

アレクはこの一年間自分でも気づいていないうちに、本心を押し殺して無理をしていた。それを、師匠であるノックスが、すぐさま見破ったのだ。

「アレク、好きなように生きればいいんじゃない。ワシらは、アレクが幸せならそれでええんじゃない」

「そうよ。無理をすることはしないわ。アレクちゃんも幸せで元気ならそれでいいの」

ヨゼフとカーリーネも、アレクを抱きしめながら思いを告げる。アレクはみんなの前で恥ずかしいという思いはあったが、涙が止まらず大泣きしてしまう。

その様子にみんなは黙って、アレクがすべてを吐き出し終わるのを待っていた。

「みんな……待たせてごめんさい。気持ちが悪くなったよ。もう自分に嘘をつかない。この新しい人生を楽しむよ」

アレクは泣き腫らしていたが清々しい顔をしていた。

それを見たノックスを含めた全員が、大丈夫だなと確信する。

「それから、みんなに聞いてほしいことがあるんです！」

アレクは、自分の秘密を打ち明けようと話し始める。

アレクが重大な発表をすることは事前に知らされていたので、全員が黙ってアレクの言葉に耳を傾ける。

「お伝えしたいことが二つあります。一つめは、ヘルミーナにもまだ言っていないのですが、叙任式が終わったら、ヘルミーナと結婚をしたいと考えています」

それを聞いたみんなは大盛り上がりして、祝福の言葉をかけた。

「まだヘルミーナに伝えていないからわからないけど、いい返事をもらえたら結婚式の案内状を送りますね。そして、次に伝えることが今回の本題です」

ワァーと盛り上がりつつあった会議室が一転、静まり返る。

みんな、真剣な表情になっていた。

「俺は、転生者なんです……どんな反応をされるか、騙だましていたと思われられるのではないか、そう考えると怖くて、今までナタリーにしか言うことができませんでした。でも、ここにいる方には話しておきたかったです。」

それから、アレクは次のことを話した。

元の体の持ち主のアレクの魂は死んでいること。それで、地球という異世界から渉わたの魂が連れてこられ、アレクの肉体に宿っていること。そして最後にスキルの話をした。

アレクが話している間、驚く顔をする者はいたが、話を遮る者はいなかった。

話し終わると、しばらく沈黙が続く。

「そうじゃったのか。秘密を抱えるのは辛かったじゃろ？ じゃがのう。ここにいる全員、今のアレクしか知らんじゃ。じゃから、騙だましたとか気に病むことはないんじゃよ。ここにいる全員、今のアレクが大好きなんじゃよ」

ヨゼフの発言に被せるように、全員が同意する。

「アレク坊がまさか転生者だったとはな。あの強さの説明がついた。だがな、俺はアレクに負ける気はさらさらないぞ。師匠として、最強の地位に君臨し続ける。それに、最近修業しゆぎょうを怠なまけていたから弱くなったんじゃないか？ 明日模擬戦で見定めてやる。わかったな？ アレク坊」

ノックスは、わざと関係のない話をして、アレクが転生者だろうがこれまでと変わらず接することをアピールした。

少し不器用なので伝わりづらいが、ノックスらしい気遣いだった。

「僕は、アレク様に救われて今があります。それに、家族も救ってもらいました。だから、今のアレク様が僕のすべてです。それで、最近父にも話したのですが、一生アレク様の家臣として生きようと思っっています」

パスクは真剣な顔でアレクに訴えかけた。

「づう……みんなありがとう……本当にありがとう」

アレクは、先ほどに続いて涙が溢れ出して泣いてしまう。  
この時アレクは、本当に転生してよかったと、心の底から思ったのであった。

それから、みんな解散してアレクも自室に戻った。今は、マンテ爺と二人つきりだ。  
アレクは窓辺に座ってぼおーと外を眺めていた。

その様子を、じっと眺めるマンテ爺。

「ぼおーとしとるが、どうしたんじゃ？」

「なんで、今まで黙ってたんだろって。もつと早く言っておけばよかったなってね」

「どうじゃろうな？ ワシは魔物じゃから人間と考えが違うかもしれないが、皆も言っていた通り、今のアレクじゃったから受け入れてくれたと思うぞい」

マンテ爺の言葉を聞いてアレクは、しっかりと関係を構築して話したからこそ受け入れてもらえたのだと改めて納得した。

「マンテ爺ありがとう。その通りだね。本当にこの世界に来てよかったよ。じゃあ、そろそろ寝よつか。マンテ爺おいで」

アレクは寝間着に着替えてベッドに横になる。

マンテ爺もベッドに飛び乗って、アレクの枕元に行き、アレクの頭にベッタリとくっついて寝る

のであった。



朝寝しているところに、ノックスが急に部屋へやってきた。そうしてノックスに無理やり連れられて、今はストレンの街の街道にある森を奥へひたすら歩いている。

ちなみにマンテ爺はまだ眠たいようで「まだ寝かせろ」という雰囲気を出してついでにこなかった。アレクが内心文句を言っていると、ノックスが立ち止まった。

「この先だ。アレク坊、回復ポーションはあるよな？」

「え、あ、はい。常時魔法袍に五百本以上は入れています」

「そうかさうか。なら安心だな。今日は、有意義な時間になりそうだ。よし！ 先に進むぞ」

アレクの頭の中は？？？になっている。いったい何をする気なんだろうと疑問に感じる。

「そろそろ何をするか教えてくださいよ」

朝から二時間以上も歩かされて、とうとう痺れを切らしたアレクがノックスに尋ねる。

「着いたぞ。ここで俺と戦ってもらおう。昨日話したよな」

そこは見事に切り拓かれた場所で、木々や石などがいっさいない荒野に、四角い石が敷き詰めら

れたリングらしき物が中央に置かれていた。

「ここは、なんですか!？」

森の奥にこんな場所があったことに、アレクはただただ驚く。

「これは、アレク坊が王都にいる間に作ってもらった演習場だ。さらに驚く仕掛けがあるんだ。ほら、壇上にいくぞ」

言われた通りに、ノックスのあとをついていき、壇上に上がる。

そこには、半円の防御結界が張られていた。

「師匠、まさか！ 防御結界ですか？」

アレクは見上げながら言った。

「あく、最新鋭の防御結界だ。一回くらいなら、広範囲殲滅魔法にすら耐えることは検証済みだ。驚いただろう？」

「師匠、驚きましたが、広範囲殲滅魔法を試すのはどうかと思いますよ。もし壊れていたら……」

「ガツハツハツハハ、いいじゃねえかそんなこと。それより、ガントレットはあるよな？」

ノックスは隠しているが、これを作った時、二発の広範囲殲滅魔法を放った。一発は耐えたのだが、二発目は耐えることができずに、辺り一帯を吹き飛ばしてしまった。

周囲が荒野になっているのはそのせいである。

「はい！ ありますよ」

アレクはそう返答すると、ガントレットを魔法袍から取り出す。

「パスクの剣を新調するために、おやっさんの所に行ったんだけどな。『坊主のガントレットが進化したか』と聞かれたんだ。アレク坊、以前作った時に、成長するガントレットだと言われたのは覚えてないか？」

「言われたような？ 言われてないような？」

アレクは、完全に忘れていた。

「やっぱり覚えてないか。まあ、おやっさんも一定時間使って魔力を一定量注ぎ込むってことを伝えてなかったらしいから仕方ないんだけどな。一年前のあの戦闘で時間は達成しているはずだから魔力を込めてみる」

アレクは、そんな大事なことを今さら言うのかと思ったが、成長するガントレットとは気になるじゃないかと思ひ、ガントレットをはめて魔力を注ぎ込む。

結構な量を注ぎ込んだのだが、いっさい変わる様子はない。

「師匠、まだですかね？」

「俺に聞かれてもわからん！ っとうおっ」

急にガントレットが光り出す。

次第にその光が落ち着くと、なんと灰色だったガントレットが真紅しんくになっていた。

「やつとかよ。ご主人様。俺様をどれだけ待たせやがるんだ。まったくよ〜」  
なんとガントレットから声がした。

その声を聞いて、アレクとノックスは顔を見合わせる。

「師匠、今確実にしゃべりましたよね？」

「あ、ああ、そうだな。しゃべったな」

二人は、驚きながらもガントレットを凝視する。

「おいおい、そんなに見つめられちゃ恥ずかしいぜ。俺様がカッコいいからってやめてくれよ」

ガントレットが照れて、顔を真っ赤にしたような気がした。

それにしても、偉そうにしている。

「なんか、駄目な物を目覚めさせた気がしますよ」

「だな。封印して永久に魔法袍の中に入れておくか？」

アレクは、ノックスの言う通り外して魔法袍に入れようとする。

「おいおい！ 待て待て、クソご主人様！ なんばしよつてくれとんじゃワレ！ 俺様を使わんかい！ おい！ その大剣使い、本気で斬つてこい。俺様の本気見せたる。クソご主人様、剣で斬りかかってきたら剣目掛けて殴つてみる」

「師匠どうします？ 俺は構いませんが。もし腕が吹き飛んでも治せますし」

「面白おもしろい。ガントレットなんか挑発されて、逃げるわけにはいかないからな。アレク坊も本気で殴つてこいよ」

ノックスは、目をギラギラさせてやる気満々だ。

アレクも試してみるかとする。

「クソご主人様は、ただ殴るだけでいいからな。今の魔力量なら余裕だぜ」

さつきから「クソ」と連呼されてイライラしているアレクは、ぜひノックスにこのガントレットを破壊してもらいたいと思っていた。

「本気だな。ゴクゴク。《フィジカルエンハンス身体強化》。行くぞ」

ノックスは攻撃力向上薬を飲んで、さらに《フィジカルエンハンス身体強化》まで使った。

アレクは咄嗟とつさに臨戦態勢を取り、ノックスが斬りかかってくるのを待つ。

「師匠、はやい！」

素早さ向上薬を飲んでいないにもかかわらず、一年前とは比べ物にならないくらい、動きが速くなっている。

「クソご主人様、来るぜ。しっかり俺様を扱えよ」

「言われなくても殴つてやるよ。おりゃあああ」

大剣とガントレットがぶつかり合う。

すると、ガントレットから「《ブーストマックス》」と言う声が聞こえた。

直後、ガントレットの拳部分が真っ赤になる。

ノックスの大剣がミシミシと音を立てたあとバキーンと折れ、そのままの勢いでノックスの顔面へとガントレットがヒットした。

ノックスはそのまま吹き飛ばされて、地面へと叩きつけられた。

「全魔力消費！ 休眠開始」

ガントレットは、偉そうな口調ではなく、機械的な話し方で言った。

そうしてガントレットは、元の灰色に戻るのであった。

「師匠」

アレクは、焦るようにノックスがいる所へ走っていく。

「師匠、早く飲んでください」

「ううゝすまない……」

エクストラポーションをノックスの口に入れて飲ませるアレク。

あれだけの攻撃を受けて、意識のあるノックスは異常である。

「ああゝ死ぬかと思ったぞ。そのガントレットすごいな！」

ノックスは、何もなかったかのように、首を捻ってコキコキ鳴らしながら立ち上がる。

「焦りましたよ。まさかここまですごいと……あ！ 師匠、大剣を折ってごめんなさい」

「気にするな！ これは練習で使う用だ。それよりまだ時間はあるんだ。模擬戦をするぞ」

「え？ まだやるんですか？」

「当たり前だ。アレク坊に負けっぱなしは嫌だからな」

本当に師匠は戦闘狂だな、とアレクは思うのだった。



商業ギルドの一室。

机の上にあるのは、大量の書類。そして、最近他国で流行っていると言われるコーヒーが置かれていた。

書類の山と向き合いながら仕事をしているのは、ヘルミーナである。

仕事を始めてから二時間は過ぎたかどうかというあたりで、ヘルミーナは体の凝りをほぐすために立ち上がった。

そしてふと視線を前にやり、向かいのソファアにアレクが座っていることに気づいた。

驚き尋ねるヘルミーナ。

「えっ、いつからいたの？」

「結構前かな？ ヘルミーナがあまりに真剣に仕事をしていたから、邪魔しちゃ悪いと思って、ここで待ってたんだよ」

「そうだったのね。待たせてごめんなさい。それよりまた転移してきたんでしょ？」

アレクは仕事の合間を見つけて、何度かヘルミーナに会いに来ていた。

ヘルミーナは、一年前の王都襲撃以来忙しくなってしまったのもあって、こうやってアレクが転移して会いに来るのを楽しみにしていた。

「へへっ、だってヘルミーナに会いに来たくなつたからね」

「もうアレクったら、いつもそれなんだから」

呆れているように言っているが、ヘルミーナもアレクに会いたいと思っており、内心嬉しいのだ。

「ちよっとだけ時間をもらえるかな？ 大事な話があるんだ」

アレクはそう言うのと急に真剣な顔になつたので、ヘルミーナはなんの話だろうか心配になつた。もしかして振られてしまうのではないかと、少しだけ考えてしまう。

「ええ……いいわよ。どんな話かしら？」

恐る恐るヘルミーナがそう言うと、アレクはおもむろに立ち上がった。

そして、小さな箱を取り出し片膝を突く。

「ずっと一緒にいよう。俺と結婚してください」

本来ならもっと凝つたプロポーズをした方がいいのだろうと思つたが、前世においても現世においてもいっさいそのような経験がないアレクは、シンプルに気持ちを伝えることにした。

「……アレク、本当に私でいいの？ 平民の行き遅れた女よ」

「お互いを支え合つて、一生を添い遂げることでできる相手はヘルミーナしかいないと思つている。だから、一緒になろう」

アレクは、ヘルミーナの言葉に対して、迷うことなく気持ちを伝えた。

「アレグ々嬉しい大好き」

ヘルミーナは感動のあまり、泣きながらアレクに抱きついた。

それからヘルミーナはしばらく経つても泣きやまなかつた。そんなヘルミーナの背中を、アレクは擦り続けた。

「そろそろ落ち着いたかな？ それで、返事を聞きたいんだけど……」

「はい！ よろしく願います」

ヘルミーナはアレクの顔を見ると、笑顔でプロポーズの返事をした。



「これを左の薬指にはめるね。愛する女性を一生大切にしたいって意味と、婚約した証あかしに、お互い  
がはめる物なんだ」

指輪を互いの指にはめたところで、周囲からパチパチパチパチパチと祝福する拍手が聞こえる。

気づかない間に、ヘルミーナの部下が部屋にやってきていたようだ。プロポーズの瞬間から見られていたらしい。

「グスン……おめでとうございます。ギルドマスター」

「うわあああん、やっつとですね。おめでとうございます」

「私も早くいい人見つけなきゃ。おめでとうございます。マスター」

部下達がヘルミーナに祝福の言葉を投げかける。

「えっ？ えっ？ え〜。あなた達、いつからいたのよ？」

泣いて喜ぶ者もいれば、ニヤニヤしている者もいる。

アレクは驚きつつ、ヘルミーナに言う。

「全部見られちゃったね。ちなみに結婚式は、叙任式が終わってから行う予定だからね。言っていない  
なかったけど、このたび伯爵になります」

「ちよ、ちよっ……と、アレク、なんでそんな大事なことを、さらって言うのよ。伯爵ってことは、

伯爵夫人になるってことよね？ 私、頭が痛くなってきたわ……」

ヘルミーナは、まさかのこと驚くのと同時に、自分に務まるのかと不安に駆られた。

その一方で、彼女の後ろでは、部下の女性達が「玉の輿だ」とか「伯爵夫人羨ましい」とかいろいろ騒いでいる。

「大丈夫だよ。俺も伯爵になって何をしたらいいかわからないしね。それよりも、側にいてくれるだけで支えになるから」

「アレク……わかったわ。私も覚悟を決める。そうと決まれば、ギルドマスターを辞めるわ」

アレクはそう言われて暗い顔になる。

「ヘルミーナ、ごめん。ギルドの仕事のことをすっかり忘れていたよ。勝手に結婚を決めてしまっ  
てごめんなさい」

「えっ？ いいのよ。そろそろギルドマスターを辞めるつもりだったから。それよりも、アレクと結婚できる方が幸せだもん」

その言葉に、後ろから「キャー」と歓声上がる。アレクは、そろそろ仕事に戻ってほしいなと思う。

「あなた達、仕事は大丈夫なの？ あとで確認するわよ」

ヘルミーナがそう言うと、使用人達は先ほどまでの盛り上がりから一転して血相を変え、自分の

仕事に戻っていった。

「ヘルミーナも大変だね。お疲れ様」

「いつものことよ。アレク、指輪嬉しいわ。本当ありがとう。でも、指輪を贈るなんて聞いたことないけど、どこかの国の風習なの？」

「それはね……」

その後アレクは、転生したことや前世のことを話した。

その中で、指輪を贈る風習の話もしたのだった。



部屋の窓を開けると、気持ちのいい風がフワアツと部屋の中に流れ込む。

チュンチュンと鳥の鳴き声が出て、気温はちょうどいい暖かさでほかほか陽気だ。

「久しぶりにのんびりしている気がするなあ。ゆっくり手紙を読む時間がとれるなんて一年ぶりくらいかな？」

アレクは、ヘルミーナからもらったコーヒーを飲みながら、学園の友達から送られてきていた手紙を読んでいた。

「みんな元氣そうだけど、今頃何してるんだろう？ 学園にもう一度通ってみたいな……」  
アレクは、陛下から「学園を早期卒業扱いにするから、復興の手助けやポーション作りに力を貸してくれ」と言われていた。

一年前は、国の助けになるならそれでいいか、と思っていたが、いざ学園から離れてみると寂しいもので、もう一度通いたいと思うようになっていた。

「学園に通っていたら、各国選抜対抗戦と個人戦の時期なんだ。三年を差し置いて、セト、レオナード、ランス、エリーゼが選ばれたとか聞いたけどすごいよな。レオナードに至っては、個人戦にも出場か。俺も出たい〜」

ちなみに、一年前の対抗戦はアレクの抜けた穴をスローとレティが埋めて、見事に優勝したらしい。

「三年からでいいので復学できないか陛下に進言してみようかな。強くなったみんなと戦ってみたいし。それに、マンテ爺も各国選抜対抗戦とかに出られたら面白いだろうな。ねえ、マンテ爺も出たいよね？」

マンテ爺はベッドの上でまったりと寝そべっている。

「うむ。ワシも暴れてみたいわい。小童<sup>こわら</sup>どもが、どれだけ強いのかも気になるしろう」

「だよ。タイムでの対抗戦とかあったら楽しいのに。学園じゃなくてもできないか、陛下に聞いてみたいよね？」

てみよう。陛下には散々こき使われたし、強気に交渉してみようかな。アハハハ」

「面白そうじゃのう。玉座の間でワシが大きくなって加勢するなんてどうじゃ？ 『ワシとアレクを怒らせるとはいいい度胸してるな、貴様！』なんて言うのも面白そうじゃがな」

「アハハハ、そんなことしたら前代未聞だし、歴史に残りそうだけど、斬首刑になるよ。でもそうになったら、マンテ爺に乗って他国におさらばってね。まあ、父上と母上と兄弟に迷惑をかけられないから、そんなことはできないけどね」

寝そべりながら笑っていると、トントントンとドアをノックする音が聞こえた。

「アレク様、旦那様がお呼びです。執務室までお願いします」

「はい！ 今行きます。マンテ爺はここで待っててね」

「わかった。寝て待つとるわい」

ドアを開けるとセバンがおり、執務室に案内をされる。

執務室のドアをノックする。

「旦那様、アレク様をお連れいたしました」

「入ってもらいなさい」

ヨゼフの入室許可が下りたので中に入る。

そこには、商人のランドと、パスクと、パスクの父親のスペインズがいた。セバンは「それでは、私は失礼いたします」と言っただアを閉めた。

「おお、アレクよく来てくれたのう。では座りなさい。ランド、すまんが、もう一度さっきの話をしてくれんか？」

「はい、わかりました。先日コーヒーを魔ノ国に買いつけに行った際に、とある噂を耳にいたしました。なんでもウズベル王国に戦争を仕掛けるというものでした。噂に過ぎないのでお伝えするか悩んだのですが、本当であれば一大事だと思い、まずヴェルトロ伯爵様にお伝えしに来たというわけです」

まさかの「戦争」という言葉が出てきて驚くアレク達。

パスクが、魔ノ国の元侯爵であるスペインズに尋ねる。

「父上は、戦争について魔王様から何かお聞きしていますか？」

「いや。そんな話はなかったな。俺が去ったあとに決まったのだろうか」

ヨゼフが顔をしかめて言う。

「一年前にあのようなことがあったにもかかわらず、また戦争とはのう。すぐに陛下に知らせねばならん。アレクよ、すまんが転移を頼めるかのう」

「父上、わかりました。言っただけならば、いつでも転移できます」

アレクが答えると、ヨゼフがスペインズに尋ねる。

「すまんが魔ノ国について教えてくれんかのう」

「わかりました、伯爵。わかる情報はすべてお伝えします。戦争になると十五万の兵が動員されます。魔ノ国には四天王がいますが、直接参加することはなく、魔王様を護衛するだけです。しかし、アレク様などが戦争に駆り出された場合、四天王もさすがに出てくると予想します。そうなれば戦争は激化して、大量に犠牲者が出るでしょう。とはいえ、そもそも私には疑問に感じていることがございます。魔王様は、むやみに争いを引き起こす方ではありません。何かしら理由があるに違いありません」

ヨゼフはさらに表情を曇らせる。

「十五万と……考えとうないわい。陛下にはそう伝えておこう。しかしのう、まだ確定ではない。先走って行動せんようにのう。では解散とする」

スペインズも頭を抱えながら出ていった。父の様子を心配するパスクが、彼に寄り添う。

アレクは、できれば戦わずして事態を收拾できないかと思うのであった。



屋敷のホールに、王城へ行くヨゼフとアレクの見送りのため、カリーネ、ノックス、パスク、スベイビズが集まっていた。

「すまんが、留守の間、屋敷を頼んだぞい」

「あなた、大丈夫よ。こんなにも強い人達がいっぱいいるんですもの」

「もし陛下に魔ノ国のことでより詳しい情報を求められましたら、私でもパスクでもいいので、すぐ呼んでください。なんでもお答えします」

ヨゼフに、カリーネとスベイビズが返答をする。それから、ノックスとパスクが、ストレンの街と屋敷を任せろ、という感じで頷いた。

こうしてヨゼフとアレクは、魔ノ国が戦争を仕掛けてくる可能性があることを陛下に伝えるため、王城へ転移をした。

「父上、着きましたよ」

初めての転移に怯えるヨゼフは目を完全に瞑<sup>くろ</sup>っていた。着いたにもかかわらず、全然目を開けようとしなかったのでアレクが声をかけた。

「おっ!? おっ!? もう着いたのかのう? 転移とはすごいものじゃな……あつという間じゃわい」

目を開けると、城門前に着いていた。

「すごい便利でしょ。もし母上とデートで遠出したい時は言ってください。どこへでも連れていきますから」

「ホッホッホ。それはありがたい。いつかお願いしようかのう。ではそろそろ行くかのう」

「はい! 父上」

そして、門番がいる所まで歩いていく二人。

「すまんが、陛下に取り次いでくれんか? 国家の一大事だと伝えてほしいんじゃ」

門番に貴族証を見せ、用件を伝える。

「ヴェルトロ伯爵様、王印が捺された物をお持ちでしょうか? ただ今、謁見の予定がない方を通すことができないようになっております」

緊急だと伝えたのだが、許可がない者は貴族であろうと陛下と会うことはできないようだった。

「国家の危機に関わる情報を持ってきておるのじゃが、通してはもらえんかのう? ならば、宰相様に、ヴェルトロが王国の危機を知らせに来たと伝えてくれんか?」

「申し訳ございません。決まりですので、謁見の許可をお取りください」

門番は一向に譲らなかった。

そこで何かを思いついたアレクは、ヨゼフにそっと声をかける。

「父上、一度帰りましょう。俺に任せてはもらえませんか？」

「うむ。迷惑をかけたのう。事前に謁見許可を取ってまた来るとしよう」

ヨゼフがそう言うと、門番は頭を下げた。

「ヴェルトロ伯爵様、大変申し訳ございません。一年前にあのような事件があつてから厳しくなつておりまして」

「構わんぞい。アレク、行くとしようかのう」

アレクとヨゼフはなぜか笑顔で城門外に向かった。

城外にて、二人は話し込む。

「父上、もしかすると捕まる可能性がありますますが、俺の案に賛成してくれますか？」

「当たり前じゃ。王国の危機を知らせに来て、捕まるならそれまでの国じゃわい。今すぐ陛下のいであるう執務室に転移をするんじや」

少しは躊躇するかと思いきや、ノリノリで賛成するヨゼフ。それに、転移で城に乗り込むこともわかつていたようだ。捕まらない確信でもあるのだろうかと思うアレクであった。

「では、父上掴まってください。転移します」

ヨゼフは、アレクの肩に手を置く。

すると、その場から二人は消えるのだった。

「やはり一瞬じゃのう。陛下、王国の危機をお知らせしたく、アレクの転移でやってまいりました」

「うおっ！ なんだ!? つてヨゼフにアレクか！ 驚いて心臓が止まるかと思つたぞ。して、王国の危機とな？ 今すぐ説明せよ」

転移してきたことに驚きはしたものの、さすが国の最高権力者だけあつて切り替えが早く、すぐに真剣な顔つきになる。

「まだ確証はございませんが、鼻肩ひなせにしている商人から、魔ノ国が王国に戦争を仕掛けようとしていると耳にしました。魔ノ国の元侯爵であるスペイビズスペイビズ曰く、魔王が理由なく攻めてくるはずはないとのこと。とはいえ本当に戦争となれば一大事と考え、失礼とは思いますが、転移で直接会いに来た次第でございます」

ヨゼフの説明に、陛下は驚く様子さえ見せない。

「やはりか……すでに一年前、密偵から報告が上がつてきておる。しかし、警戒はしておるのだが、兵を集めておる様子が一向に見受けられん。余もどうしたものかと手をこまねいておるところだったのだ」

戦争を仕掛けようとしつつもの、兵を集めていないとはどういうことだろう、とアレクとヨゼフは思う。

「本当によくわかりませんね。一度使者を派遣するなどしてはいかがでしょうか？」

「使者の派遣は検討中である。だがな、これまで国としての付き合いが皆無であったため、何を理由に派遣するかで悩んでおるのだ。今後の進展次第では、もしかするとアレクの手を借りる可能性が出てくる。期待してよいか？」

アレクはまた「はい」と答えそうになったが、ノックスが、なんでも引き受けるべきではないと言っていたのを思い出して踏み止まる。

「陛下！ 私はこの一年、国のために身を粉にして働きました。十三歳にしてです。もう疲れました。ですので、もし何か私に命令される場合、条件として、来年の三年次から学園へ復学すること、自分の間は法衣貴族のままであることを、希望いたします」

アレクの言葉に、陛下が答える。

「余に対し要求すると申すか？」

「はい！ もし気に入らないようであれば伯爵の地位もいりません」

陛下は、真剣な顔で訴えるアレクを睨みつけるように見る。

しかし段々破顔していき、次第に大笑いし出した。

「ブツハハハハ、よいよい！ 余にここまで意見をした者はおらぬ。条件を呑もう。他国に逃げられても困るからな」

「陛下、お戯れがすぎますよ。あまりアレクをいじめると本当に他国へ逃げてしまいます。それに

陛下、エリーゼ王女様に嫌われますよ」

ヨゼフがエリーゼという名前を出した瞬間、陛下は「ヴツ」と口にして、痛い所を突かれたという顔をする。

「ヨゼフよ、それを言うでない。余の一番の弱点ではないか。アレク、すまなかった。余は、時折アレクが十三歳の子供であるということを忘れてしまうのだ。なんでもこなしよるからな。本当に申し訳なかった。余を許してはもらえぬか？」

アレクは驚いて答える。

「陛下、謝らないでください。もう少しお手柔らかにお願いしたいだけです」

「ブツハハハハ、わかった。お手柔らかに、こき使わせてもらおう」

陛下は、笑いながら冗談っぽく発言した。それを聞いたアレクとヨゼフも、思わず笑ってしまうのだった。



アレクはマンテ爺を連れ、久しぶりに冒険者ギルドを訪れていた。たまには息抜きをしたいと思っただからだ。

「ミアさん、お久しぶりです。何か依頼はありますか？」

受付にミアがいるのを見つけ、アレクは声をかけた。

「え？ アレク様ですか？ アレク様の武勇伝は冒険者の間に広がっていますよ。主に他の領地から来た冒険者が語っています。それより依頼でしたね。緊急依頼があるのですが……受けていただけますか？」

すると背後から声がかかる。

「おいおい、そんな坊主に緊急依頼か？ 俺様が受けてやるよ。なあ坊主、俺様に譲れよ！ 痛い

目を見たくなかったらな」

アレクは、「はあ」とため息を漏らした。

そこへ、冒険者がアレクの周りに集まってくる。

「おい！ おっさん、英雄様に向かって随分偉そうだな。もし英雄様の依頼を奪うような真似をし

てみる。ここにいる全員がお前らの相手になるぞ。嫌なら大人しく出ていきな」

集まってきたのは、アレクを「英雄様」呼びをする冒険者達だった。アレクは、なんだなんだ？ となる。

「なんだよお前は？ このガキがなんだってんだ！ づっ……チッ！ お前ら行くぞ」

男がアレクのことを「ガキ」と言った瞬間、ズイツと冒険者達が近づく。そして、冒険者達の威圧でその男は居心地が悪くなって、仲間と冒険者ギルドを出ていった。

「あの……ありがとうございます」

アレクが礼を言うと、冒険者達は騒ぎ出した。

「うおおお、今、俺の顔を見てお礼を言ってくれたぞ」

「おい！ 俺に言ったんだよ」

「違うわ！ 私に言ったのよ。英雄様は私の顔を見て言ったの」

しばらく経っても騒ぎが収まることはなく、ギルドマスターのゴールドンと、サブギルドマスターのニーナが二階から下りてきた。

「なんの騒ぎだ！ ってアレク様！ お越しになられていたのですか？ あの薬……あ痛あああ」

ゴールドンがアレクの作った毛生え薬の話をしようとした瞬間、ニーナがゴールドンの頭を引っ叩いた。

「アレク様、バカマスが失礼いたしました。いったいこの騒ぎはなんですか？」  
 ギルマスを「バカマス」呼ばわりするニーナ。アレクは、ニーナは苦勞してるんだなと思い、苦笑いした。ゴルドンは「ギルドマスターなのに……」と呟きながら悲しい顔をしている。  
 「俺にもわからないんですよ。絡んできた冒険者から救ってもらったのですが、急に英雄呼ばわりされて……」

ニーナはあくという顔をする。  
 そして冒険者に向かって怒鳴りつける。

「静かにしなさい！ 静かにしろって言ってんだ！ クソ野郎どもがあああ」  
 一回目で静かにならなかったので、すごく口が悪くなった。  
 アレクは、あのニーナさんが？と思わず二度見してしまう。

「ほら、静かになりました。アレク様、今日は依頼を受けに？ それとも、何かご用でしたでしょうか？」

「え？ あ？ え？ あ！ はい。依頼です。何やら緊急依頼があると聞いたので、それを受けようかと」

ニーナの変わりように、アレクだけでなく、周りにいる冒険者、真横にいたゴルドンまで驚いている。

「そうでしたか。では、今すぐ手続きをいたしましょう。ミア、緊急依頼の手続きを処理してちょうだい」

「あ！ はい。すぐに手続きいたします。アレク様、冒険者証のご提示をお願いいたします」

「はい」

ニーナの一言で、一瞬にして手続きが完了した。

「ではアレク様、トロール討伐をよろしく願います。ご武運を」

ニーナがそう言うと、アレクは「はい！ 任せてください」と言っただけで冒険者ギルドを出ていくのだった。

「俺の薬髪様」

後ろからゴルドンの声が聞こえたような気がしたが、アレクは聞こえないフリをした。

「アレクは、いつも問題に巻き込まれるのう。それにしても、あのおなごは肝が据わっておるわい。ええおなごじゃ」

マンテ爺は、どうやらニーナのことが気に入ったようだ。

「アハハハ、ニーナのことを気に入ったんだね。確かに……うわあ、面倒なことがまたやってきたよ」

マンテ爺と話していると、前から、さっき絡んできた四人組が現れた。

「おい！ 坊主、いやクソガキ、俺様を舐めやがって！ 許さねえからな。お前らやつちま……ぐへえぐはあごへえ」

絡んできた男は、急に現れた冒険者にズタボロにされた。

冒険者が言う。

「英雄様、早くトロール討伐に向かってください。こいつらは俺達にお任せを」

「え？ ありがとうございます」

アレクがそう言うと、冒険者達は絡んできた四人組を引きずって去っていった。

「今日は、おかしなことばかり起きるよね」

「そうじゃな。まああっさり解決してええじやろ。ほら、早く討伐に行くぞい」

「そうだね。行こう行こう」

こうしてアレクとマンテ爺はトロール討伐へ向かった。



アレクは今、大きいサイズになったマンテ爺に乗って目的地に向かっていている。最初は転移で向か

おうとしたのだが、どうやら転移は一度訪れた場所以外は無理なようだ。

「マンテ爺、前より速くなってないか？ それに、いつさい風を感じないんだけど」

自動車以上の速さで走っているにもかかわらず、風の抵抗を感じなかった。

「ワシは修業して防御結界を手に入れたんじや。その防御結界を体全体に張っておるから、いつさい風の影響を受けんのじやよ」

アレクが陛下からの仕事に追われている頃、よく勝手に外出をしていたマンテ爺。どうやら、遊びに出掛けていたのではなく、修業をしていたようだ。

「そうだったんだ。快適すぎて驚いてるよ。じゃあ、戦闘でも防御結界を張りながら戦えるし最強だね」

「そうじゃのう。前より接近戦ができるようになったわい」

「だったら、トロール討伐の時にこんなのどうかかな？」

アレクはマンテ爺に、今回どう戦うか説明をした。それを聞いたマンテ爺はノリノリのようだった。

その後も作戦会議をしながら走っていると、依頼があった村に到着した。

「おい！ この村になんの用だ？」